

# 犬の話

或る處に大そう犬の好きなおぢいさんがありました。其おうちには大きな犬や小さな犬がたんご飼つてあつて、其犬の毛色も、黒、白、茶、赤、ぶち、なぎで、皆元氣な可愛らしい者でした。

其隣に友吉さんと言ふ、犬が大好きな子供がおりまして毎日おぢいさんのおうちに行つて犬を見せてもらつて楽しんで居ましたが、いつの間にか澤山の犬とお友達のように仲よしになつて犬は友吉さんの脊中におぶさつたり抱かれたり友吉さんを脊中に乗せてお馬になつたりお角力を取つたりして喜んで遊びました。友吉さんは能くおぢいさんのお手傳をしました、夫れはみんな事だと言ひますれば、多勢の犬の小屋のお掃除や又其寢床に新しい柔らかな藁を入れ換えてやる事や餌をやる事で、又時々多勢の犬に行水さして體を奇麗にしてやる事でした、おぢいさんは友吉さんのお手傳してくれるのを大層喜んで何かごほうびを上げ様さ

氏 原 銀

考へて、友吉さんは犬が好きだから白い犬を御禮に上げました。友吉さん大層喜んで戴いた犬をおうちに持ち歸りました。おさうさんおかあさんも此犬を可愛がつて育てました、此犬は利巧な犬で悪る者の番をしたり又お使ひに行つたりお供をしたりして家の爲めによく働いて居ました。

時に此白犬が元氣がなく弱つて仕舞ましたので皆が心配して犬のお醫者さんの處へ連れて行つて見てもらひました處、之はお腹がわるいからださすぐに其病院へ入院せました、夫れから毎日おさうさんやおかあさんや友吉さんが代りかわりに病院へお見舞に行きました。だんだん犬の病氣がよくなつて來ましたので皆が大喜びでした。或日友吉さんが學校から歸りがけに犬を見舞に行きました處、白犬が居ませんので驚いてお醫者さんに尋ねましたら、お醫者さんも大層ビックリして心配しましたが、お醫者さんは暫く考へて居られましてあゝ分りました犬は病氣がよくなつ

たのでお家に歸つたのですと言はれましたので、友吉さんは犬は歸る道を知りませんから駄目ですと言ひます。お醫者さんは犬は來た道を能く覺えて居る者ですから大丈夫ですと言はれましたので、友吉さんは案じながら急いでうちに歸つて見ます。白犬は歸つて居て喜んで尾を振つて迎へましたので、ほんまにお醫者さんの言はれた通りだ。大層喜びました。

又或る時おさうさんが鳥打ちに鐵砲を以て行きますのに、犬に鳥をさがしたり又追つたりするお手傳をさせる爲に連れて行きました。随分遠い野道や町中や村の中を通つてきました。ふまおさうさんは後の方を見ます。附いて來た筈の白犬が見えませんが、之は大層賑をした、さうで迷子にしたのだらうと考へ、之は大層賑やかな町を通つた時に自分の姿を見失つたのだらうと思ひましたが、此の初めて遠い道をさうして白犬は歸る事は出來まいとほんまに失敗した。後悔して家に歸つて來ます。白犬はチャント歸つて居まして尾をふつて嬉しそうに迎へてくれましたので、おさうさんも大喜びで此遠い初めての道をよく歸る事が出來た事。犬のかしこいのを感心し

ました。

又或る時おかあさんがお友達の所へ用があつて行く時、白犬が付いて來ますので、白お前は付いて來ずにお歸りと言ひましても付いて來ました。おかあさんは其お友達の家の前でもうお歸り。白犬に言つて家に入りました。夫れから其處の家のお座敷で夕方迄お話をして歸らうとして其家を出て見れば、疾くに歸つたと思ひました。白犬は、其處にチャント待つて居ますので、白お前は先つきから長い間待つて居たのか。嬉しいやら氣の毒やら白の親切を思ひまして大層よろこびました。夫れから夕方の淋しい道を白と一緒に賑やかにおうちへ歸りました。又或る時友吉さんが大事件な手帳の入つてある風呂敷包をなくしましたので、何處で落したのか。心配して居ます處へ白犬は其の風呂敷包をくわへて持つて來てくれましたので。友吉さんは大そう喜びまして、此事をお隣のおぢいさんに話します。おぢいさんは犬と言ふ者は大變鼻でにほひをかく力が強いから其風呂敷包にお前のにほひのあるのを知つて持つて來たのだと言ひました。又犬達は鼻のかぐ事のえらいのでおまはりさん

(四六頁へ續く)

ミ！今までこんなに多くの圓いお目々、林檎の様な顔々に對しておはなしをした事が無かつた私は、子供達の可愛さに引かされて、始めの恥かしかつた氣持も次第に薄らぎ、落つて話を進めて行く事が出来た。……そして話し終つて子供達が拍手した時、ホツミして我に歸り自分の周圍に大人も居た事に始めて氣がついたのだつた。おはなしをしてゐる時はそれに氣づく餘地の無い程、そんなに熱心に子供達がよくこそ私の初經驗の話に耳を傾け心をこめて聽いてくれたればこそ、下手ながらも始めてのおはなしを無事にすまます事が出来たのだと思ふに、一層この子供達に對する親しみが増し、歸りがけに窓から「先生、又來ておはなししてやあ」ミ叫ぶ元氣な聲に、保姆としての私のこれらの人生がこの子供たちによりその門出かきだを祝福された様な心地がして、嬉しさを感謝の心で一ぱいになる……

ミいふ様な心もちを、多少その人の個性により文のあやに違ひがあるが、大體右の様な心境の告白である事は云ひ合した様に、否最も自然にして必然なる心の眞理として皆が一致してゐる。この感想文に一々祝福の言葉を書き添へて

返した時、小生は眞に心から「お芽出度う」ミ云つた。この新しい心の經驗により、彼女達が未知の世界に一歩を踏入れ、前途に大きな希望の光を今見出し得た事が明かに讀まれたからである。幼児に對する感謝の念！これこそは嘗て本誌第三十卷第二號に「おはなしについての反省」ミ題して記した如く、小生が十年にして漸く到達した心境である。然るに今、名實共に處女經驗を以て小生のこの心に一致する體験を獲得せられたる多くの親しき友の告白を聽いて實に感慨無量である。松美先生は「おはなしに於ては私達はいつも初心者である」ミ云はれたが、この初心者の心境こそは、常に新しき謙虛なる心を以て幼児の前に出で幼児ミ偕に語るべき地位に居る我等の態度たるべきである。

(昭和九年一月十日 新春心新なる日に)

(六三頁より)

の盜棒をつかまへるお手傳や、お助けをしたり、いくさの時敵の居る處をかぎだしたりして大變賢い役目をする者だミ教へられました大そう感心しました。(をばり)